原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第六十六号

昭和三十八年十一月、三池闘争の火が静まりかけた頃、戦時君が所属していた三川支部の坑内電気分会なかまの記念撮影。彼は一番後ろのまんなかあたりより、向かって少し左側にメガネをかけて顔を見せている。ちょっとほほえんで……。円内の人が戦時君。

原告団レポート

遺族――土山さん夫婦

今でも責める痛こん

―頼もしかった息子の青春と命を返せ―

ひっそりと生きる親夫婦

さびしさをかくしきれぬ、土山さん夫婦。三井はこの夫婦から、息子の命を奪つたのだ。あまりにも酷。

悲劇の青春

昭和三十八年十一月九日に、三井三池の労働者が三川鉱で起きた炭じん大爆発のために、四百五十八人もの命を奪われ、千人近くがCO中毒症の責め苦を背負わされたことを、知らぬ人はいない。

が――、とりわけやっと学び舎を巣立ったばかりで、すべてはこれからだ、という青春期の頂上に立っていた若者たちの、おびただしい命がもぎとられたことが、その悲劇をいっそう大きくしていることを、人は知っているか。

実は、そのような若者のなかの一人に、土山戦時君がいた。

希望が挫折

彼は、昭和十四年十一月二十八日、荒尾市水野で、三池炭鉱労働者（三池港務所勤務）の子として産ぶ声をあげた。七人兄妹（男六人、女一人。うち長男は幼没）のなかの二番目の子で、あの炭じん大爆発発生当時二十三歳と十一カ月だった。

戦時君は、三井鉱山がかって経営していた鉱山学校出身で、当時坑内電気工として三川鉱の坑内で働くかたわら、熊本商科大学短期大学の夜間部に学んでいた。翌年の春にめでたい卒業のよろこびが待っていたばかりでなく、すでに中学教師の資格取得試験に合格。卒業後は教育者として身を立てよう、との希望に燃えながら生きていたときの悲劇だった。それだけに両親はもとより、事情を知るまわりの人びとの悲しみもまたひとしおのことだったに相違ない。

痛痕が今も

父親勝雄さん。今六十六歳。三十九年十二月十一日、停年になるまで三池港務所（三井鉱山が経営）に働いてきた。

母親は千代子さん。六十歳。二人は揃って、前記の住まいで暮らしている。

勝雄さんは数年前から甲状腺肥大症をわずらい、そのため何もすることができなくなり、また千代子さんも老いが加わるにつれ、長い間つづけてきた百姓仕事もほとんど手離してしまった。さいわい近くの企業に働いている三男の信行さん一家（妻の浄美さんと、子ども二人）が両親とともに住みながら面倒を見ているが、「年をとるにつれ、どげんしたことか戦時のことがますます思い出されてならぬ」（父親勝雄さん）のである。

「あれはもっともっと勉強したい気持でいたことは、親の私たちとして知り過ぎておりました。また、それだけの頭ももっておりました。でも、あの頃港務所の賃金が低かったうえに、子どもたちが余りにも多過ぎたものですから、普通高校にさえあげてやれず、ただ苦労ばかりを背負わせながら、嫁をもたせることもなく、早やばやとあの世にやってしまいました……」。あとは目がしらを押さえ、痛痕をかみしめるだけの母親千代子さんだ。

力強い足跡

戦時君は、鉱山学校では電気科に学んだ。

三十三年、十八歳で卒業するまでほとんど首席の成績を独占。

戦時君はそのまま三池炭鉱に横すべり。三川鉱の坑内電気工として働きはじめる。三池大闘争直前のこと、石炭産業合理化の嵐がやがて吹きまくろうとするただならぬ気配が、三池全山を暗く包みこんでゆくちょうどその頃だった。

父と子が三池労組の連帯のきずなで一つに結ばれ、たたかいへ。

そんなけわしい環境を克服しながら、荒尾市内の某県立高校の定時制（夜間）高校入学。「何としてでも、大学までは……」との、崩れない大きな希望が彼の胸のなかで燃えていた。

やがて三池闘争。組織分裂。すさまじい資本の合理化攻撃。三十七年定時制高校を卒業すると、そのままひきつづき熊本商大短大（夜間）へ進学。資本とたたかいながら、大学での勉強だった。それも三池の労働者――わけても職場の連帯のささえがあってこそ、できることだったのだが。

心暖い人間

大学でも、彼の成績は群を抜いた。その証拠に、三十八年六月十一日、ときの熊本商科大学の鰐淵健之学長から彼に寄せられた表彰状がある。

戦時君は向学心が強かったばかりでなく、まわりの人びとに対してもまれに見る心の暖い人間だった。親思い、兄妹思い、友思い、年寄り思い……。

だから彼の自宅で営まれた野辺おくりの葬儀には、三池新労組員のなかままでかけつけてきて、別れを惜しんでくれた。数多くの追悼の便りも寄せられた。これは鹿児島県熊毛郡屋久町の金子武夫という人（学友か？）からのもの。

「戦時兄貴とは夜学の時から一緒に、荒尾駅より熊本まで通学したものです。もはやその兄貴がこの世の人でない、とは。信じられません。せめて告別式に、と思っておりましたが、鹿児島の屋久島で、学校という職場ではそれもできませんでした。申しわけなく思っております。ただただ私の声が戦時兄貴にとどけばさいわいです。事故の当夜テレビを見ておりましたが、あの事故が先輩の死因だとは……。私の意が、先輩の身辺にまでとどかなかったんでしょうか。もう涙が出て書けません。どうもすみません」

便りはここで切れている。

加わる老い

悲しみにうちひしがれた両親――勝雄さんと千代子さんの夫婦には法が禍いとなって遺族年金さえ支給されていず、息子の余りにも尊とすぎる命を奪っておきながら、三井鉱山はふり向こうとさえしない。勝雄さんはいつかこの会社に「息子の体を元通りにして返してくれれば、わが身はたとえ懲役につながれたっちゃかまわん。人間の言葉がわからんなら、わからんままでよか」、と抗議したことがあるが、今戦時君のいないさびしい自宅でひっそりと生きている二人のうえに、老いは日ごとに加わってゆく。